

羅生門

長唄 全詞章

原典に「杵屋勘五郎述」とあるのみ

作詞者・初演年不詳

松羽目物

能『羅生門』による

治まる花の都とて、治まる花の都とて、風も音せぬ春べかな

抑々是は源の頼光とは我が事なり、扱も丹州大江山の鬼神を随へしより此方、貞光季武綱公時此の人々を伴ひ、朝暮参会仕り候、今日も又雨降り徒然に候程に、酒をすすめばやと存じ候

有難や四海の安危は掌の内に照し、百王の離乱は心の内にかれたり、曇りなき君の御陰は久方の、空も長閑けき春ぞ久しき如何に面々、誠に興も候はねど、此の春雨の晴間なく、昨日も今日も暮ぬとて、入相の鐘つくづくと

春の眺の淋しきに、伴ひ語らふ諸人に、神酒を進めて盃の、取りどりなれや梓弓、矢猛心のひとつなる、兵の交り頼みある中の酒宴かな

いかに保昌

御前に候

此の程都に珍しき事は候はぬか

さん候 九条の羅生門にこそ鬼神の住で、暮れば人の通らぬ由申候

暫く土も木も、我が大君の国なれば、何処か鬼の宿と定めんと聞く時は、仮令鬼神の住めばとて住ませて置かるべき、斯る疎忽なる事を仰せ候ものかな

何と某が御前にて疎忽を申候や

中々の事

誠左様に思召さば、今夜にもあれ羅生門に行き御覧候へ

扱も某が行くまじき者と御覧じ、限りて承り候由さらば標を立て帰るべしと、左もあらげなく言いければ、満座の輩一同に、是は無益と支へける

イヤ保昌に対して遺恨はなけれども、一つは君の御為なれば標をたべと申けり  
実に綱が申する如く、標を立てて帰るべしと、札を取り出でたびければ

綱は標を給はりて、綱は標を給はりて、御前を立て出にける  
扱も渡辺の綱は仮初の、人の言葉の争により、鬼神の姿を見んために、物の具取つて肩に掛け、同じ毛の兜の緒をしめ、重代の引けば返さじ武士の、矢猛心ぞ恐ろしき

扱も渡辺の綱は仮初の、人の言葉の争により、鬼神の姿を見んために、物の具取つて肩に掛け、同じ毛の兜の緒をしめ、重代の太刀を佩き、猛りたる馬に打乗つて、舍人をも連れず只一騎、宿所を出でて二条大宮を、南頭に歩ませたり

春雨の音も頻に更くる夜の音も頻に更くる夜の

東寺の前を打ち過ぎて九条表にうつて出で、羅生門を見渡せば、物凄じく雨落ちて

俄に吹き来る風の音に、駒も進まず高嘶き身振ひしてこそ立つたりけれ  
其の時馬を乗放ち、その時馬を乗放ち、羅生門の石段に上り、標の札を取り出し、壇上に立て置き帰らんとするに

後より甲の鍔を捉んで引き上げければ  
スハヤ鬼神と太刀抜きて持つて切らんとするに

取つたる甲の緒を引きちぎつて  
覚えず壇より飛下りたり

斯くて鬼神は怒をなして、かくて鬼神は怒をなして、持つたる甲をかつぱと投げ捨て、その丈衡門の軒に等しく、両眼日月の如くにて、綱を白眼で立つたりける

綱は騒がず太刀差しかざし、綱は騒がず太刀差しかざし、汝知らずや王地を犯す、其の天罰のがるまじとて掛りければ  
鉄杖を振上げゑいやと打つて

飛び違つて丁と切る

切られて組付くを

払う剣に

腕打落され、怯むと見えしがわきつづに上り、虚空をさして上りけるを

慕ひ行けども黒雲覆ひ、時節を待ちて又取るべしと、呼はる声も幽に聞ゆる鬼神よりも、恐ろしかりし綱は名をこそ上げにけれ